大学生の甘えの心理に関する一考察

河　　野　　清　　志*

A Consideration on psychology of Amae in university students

Kiyoshi Kawano

要旨：本研究の目的は、大学生における甘えを実証的に検討することである。研究Ⅰにおいて、新たに甘え尺度を作成し、研究Ⅱでは作成した甘え尺度を用いて甘えの心理と性差を多面的に分析し、甘えの因果モデルの検討を提唱した。調査対象は大学生403名（男性150名、女性253名）であった。その結果、①男性よりも女性の方が甘えが多くみられ、男性は甘えを拒否、または回避する行動を考えることが多い②友達に対する道具的甘え欲求や恋人に対する情緒的甘え欲求に性差は見られなかったことから、甘えの表出が状況や対象により異なる③女性は状況や対象により甘えることに対する抵抗感が変化するが、男性では甘えの抵抗感に変化が見られない。また、女性は男性よりも状況や対象により甘えを受容することから、女性は外的基準を基に、男性は内的基準を基に甘えられるかどうかをモニタリングしている④女性において、甘えさせてくれるだろうという予測と甘える行動、アンビバレントな気持ちで甘えられないでいる行動、甘えることに対して拒否・回避的な行動をとることに関連が見られる。⑥このことから女性は対象が甘えを受容してくれるかどうかの予測が行動に影響を与えることが明らかになった。

Abstract : This study is aimed to demonstrably review amae among college students. We newly formulate a measure of amae in Research I and multilaterally analyze their mentality and gender difference in amae by use of such measure, setting up to examine a casual model of amae. Subject of our investigation consist of 403 students（150 males and 253 females）. As a result it became apparent that ;（ i ） females tend to amae more than males, while males tend to think of an action to reject or avoid amae ;（ii）representation of amae depends on situations or subjects because there is no gender difference regarding instrumental amae desire to friends or affectional amae desire to lovers ;（iii）females change their resistance for amae depending on situations or subjects, while males maintain constant resistance for amae, and females monitor based on external standard but males monitor based on internal standard whetehr amae is permitted, looking at females tend to amae depending on situations or subjects more than males ;（iv）there is relation between expectation to be permitted amae and amae behavior, self-suppressing amae with ambivalent feeling, self-rejective or avoiding behavior to amae ;（ v ） from above behaviors of females are affected by expectaion whether amae is accepted or not by subjects.

Key words : 甘え　Amae　大学生 college students　因果モデル causal model

---

*関西福祉科学大学社会福祉学部　助手

問題提起

「甘え」理論をはじめに展開した土居（1971）によると「甘え」とは、「乳児が母親に密着することを求めること」であり、「人間存在につきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚することである」つまり、乳児が発達し、自分は母親とは別の存在であると気づいた後に、母親を求めることが甘えの始まりであるとしている。

しかし、この土居の定義には批判や異議を唱える者も多く、これに対しては土居による反論が繰り返されており、様々な研究者が独自の定義や理論を提唱している。例えば、竹友（1988）は、「甘え」を「同意の上で常規の、ある拘束から解放された〈意味の場〉あるいは〈関わり合いの場〉を規定するメタ言語」であるとした。つまり「甘え」を「親が子供にその年齢にふさわしい程度の行儀を保つという社会的な拘束から解放されてふるまってよいという」意味を与えるメタ言語であるとした。山口（1998）は竹友の「常軌の拘束」という概念を取り上げ、「常軌」を「甘えている者ではなく、その行動を観察する立場にある者の主観的な基準」と定義した上で、「甘え」を「自分の行動や願望が相手の考える常軌にあっているか否かに関わらず、相手がそれを受け入れることを期待すること」と定義している。祖父江（1972）は、「甘え」とは「最初から相手が自分を受け入れてくれるであろうことを期待しながら、depend すること」であると定義している。また、小此木（1989）は、「甘え」を「ある種の安心しきった、お互いを愛し合っていることをどこかで確認しあっている」という相互性と考えている。

このように、「甘え」に関する定義や解釈は研究者によってさまざまであり、未だに「甘え」の位置づけがはっきりしていない。この原因として指摘されていることは、「甘え」理論を初めに展開した土居が、「甘え」の概念規定を明確にせず、「甘え」の自明性を強調したことである。つまり、「甘え」は誰もが体験済みのことであり、誰もがわかっていることであるとして、それ以上言明しなかったことにある。土居の「甘え」理論では精神分析概念としての「甘え」と日常語としての「甘え」が区別されていないまま混在して使われている点も批判として指摘されている（例えば、小此木、1968；荻野、1968）。

こうした「甘え」理論の混乱に関して、長山（2001）は「甘え」を巡る議論は基本問題からすでに錯綜していると指摘している。つまり、甘え理論の問題点を整理するには、土居の「甘え」の定義の曖昧さや矛盾をいくら指摘しても益は少なく、彼が甘え概念を導き出した具体的な症例の記載にまで踏み込んだ検討が必要であると述べている。さらに、「土居は甘えが定義に馴染まないと言いながら、実はさまざまな形で『甘え』を定義しており、ときにはまったく相反する定義を行っている。大切なのは甘えをどう定義するかといった単純な問いの立て方ではなく、甘えはなぜそのように多義的にあるいは相反する定義や描写が可能なのかを探っていくことにある」と述べており、「甘え」の現象自体の曖昧さと理論の曖昧さを区別し、両者は混同されるべきでない、と主張している。

ところで、「甘え」に関する議論や検証はさまざまな分野から行われており、「甘え」に関して多くの研究者が興味を持っているが、「甘え」を実証的研究という視点から検証しているものは非常に少ない。

「甘え」についての実証的研究は、藤原・黒川（1981）の「対人関係における「甘え」についての実証的研究」が初めてであろう。この研究では、土居によって精神分析的見地から提唱された「甘え」の数量化を目指し、いかなる対象に対して、どのような状況のもとで「甘え」が最も表出されるのかを明らかにすることを目的として、大学生を対象とした調査を行っている。11 の困った状況のもとで、12 の対象人物

に対する感情を10の甘え尺度で評定することが求められ、その結果「甘え」の表出は対象によって異なり、両親よりも恋人・親友の方が「甘え」が多く見られ、「甘え」の表出においては男性よりも女性のほうが多くの「甘え」が見られた。また、困った状況の家庭問題に関する状況では、両親や兄弟姉妹に対して「甘え」を最も示し、個人生活の問題に関するその他の状況では、恋人や親友に対して「甘え」を強く表出するという結果を得ている。

また、外山・高木（1991）らは、青年期の男女（大学生、高校生、中学生）の意識的なレベルでの「甘え」の心理について、多面的な分析を試みることを目的とし、「甘え」の対象（父親、母親）と困った状況を設定した刺激文を提示し、自分がその主人公になったと仮定して、その時の①「甘え」に関する価値観、②「甘え」の欲求、③対象の受容に関する予測、④自分が甘えることへの抵抗感を調べるため、質問紙による調査を行っている。この研究では、男子は「甘え」を否定的にとらえ、女子は肯定的にとらえていることが示唆され、「甘え」の欲求は女子の方が強く、年齢が上がるにつれ、性差が広がるという結果を得ている。また、「甘えを受け入れてくれるだろう」という対象の受容に関する予測については、男子よりも女子の方が肯定的な予測を行っており、自分が甘えた際に、相手がそれを受け入れてくれると考える傾向が強いという結果であった。甘えることへの抵抗感については、年齢に関係なく男性のほうが強く、「甘え」に関する価値観は、年齢に関係なく、女子の方が肯定的であった。

これらの結果から、男子と女子とでは、甘えたいと意識した場合に、実際に甘えるか否かの判断には違いがあり、女子はその判断の基準は他者基準であり、対象の受容に関する予測と強い関連があると考えられる。一方、男子は甘えるか否かの判断は、対象の受容に関する予測とはあまり関連がなく、躾により内面化された自己基準に影響されると考えられ、社会からの制約によって、「甘え」に関してより否定的な価値観を内在化したため、男子の「甘え」はより「建前」に支配され、限られた状況において、限られた対象にしか甘えられないと思われる。

このような先行研究から、甘え欲求は女性の方が強く表出し、対象により甘え欲求の表出に差があり、また甘えのメカニズムには性差があることが示唆されている。しかし、これらを詳しく立証するためには、さらに多面的に分析できる尺度の作成が必要である。また、これらの研究がなされてから10年以上経過しており、甘えの心理について再検討する必要があるだろう。

そこで、本研究では、甘えの多面的に分析が行える尺度を新たに作成し、その尺度を用いて、甘えの心理と性差について分析を行うことを目的とする。さらに甘えの因果モデルについての検討も試み、さらに今後の研究課題についても言及することとする。

研究Ⅰ　甘え尺度の作成と検討

予備調査

1. 目的

本研究では、大学生が持つ甘え観や学生生活を通して経験する身近な甘えに関する出来事ついて探り、本調査の甘え尺度を作成するための基礎資料を得て、それを基に甘え尺度を作成することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象

大阪府内の私立大学生2・3回生を調査対象とした。有効回答が得られた126名（男性45名、女性81名）を分析対象とした。

(2) 調査期間

調査は2003年5月下旬～6月上旬に行った。

(3) 調査内容

無記名で、甘え観や学生生活を通して経験する甘えに関する出来事ついて自由記述で求め

た。回答は複数回答を可とした。

(4) 手続き

質問紙を配る前に「次に配る質問に書かれていることに対し、思いつくまま、ありのまま答えてください」と教示した上で、講義時間を利用し実施した。

3. 結果と考察

(1) 刺激文の作成

回答をまとめたところ、508 項目（男性 125 項目、女性 383 項目）を得ることができた。次に、これらの項目の表記の類似性や適切性を検討し、215 項目選出した。その後、心理学を専攻する大学院生 1 名とともに KJ 法による分類を試みた。その結果、甘え欲求には大きく分けて、周りの者に自分の欲求を充足するために、必要な資源や便宜を求めようとする道具的甘え欲求と、心理的安定や充足を求めようとする情緒的甘え欲求の 2 つに分けられ、甘える対象や状況により、甘えの表出とそれに伴う行動が異なることが示唆された。これらの予備調査の結果と、外山・高木（1991）、加藤（1999、2001）が作成した「甘え」に関する物語文を参考に、甘え欲求が生起される刺激文を作成した。刺激文は友達に対して道具的甘え欲求を生起させる「状況 A・対象：友達」、親友に対して情緒的甘え欲求を生起させる「状況 B・対象：親友」、母親に対して道具的甘え欲求を生起させる「状況 C・対象：母親」、父親に対して道具的甘え欲求を生起させる「条件 D・対象：父親」、恋人に対して情緒的甘え欲求を生起させる「状況 E・対象：恋人」の 5 つの物語文を作成した。なお、物語文の主人公については架空の人物 A を想定し、被調査者は人物 A の気持ちを推測する形で回答するようにした。予備調査により甘えは否定的な価値観も含まれていることが示唆されたため、被調査者の回答に対する心理的抵抗を減らし、より無意識的なレベルを探るために投影法的な手法を試みることにした。

次にこれらの刺激文の表記の適切性を検討するために、心理学を専門とする大学教員 1 名と心理学を専攻する大学院生 5 名に検討を依頼し、若干の修正を加え完成させた。

(2) 質問項目の作成

予備調査で得られた回答と土居（1971）の「甘えの構造」の中で使用されている言葉、藤原・黒川（1981）、外山・高木（1991）が作成した甘え尺度を参考に、質問項目を作成した。さらに、今回一つの試みとして、実際に甘え行動に至るか否かを考えることを「行動思考」とし、この考えを基に、実際に甘えようとする行動に至ると考える「甘え行動思考」、本当は甘えたいが実際には甘え行動には至らないと考える「アンビバレントな甘え行動思考」、実際には甘えることを拒否または回避する行動に至ると考える「拒否・回避的な甘え行動思考」の 3 つの甘えに関する行動思考を考え、尺度に加えることにした。

①甘え欲求
②甘え受容予測
③甘え抵抗感
④甘え行動思考
⑤アンビバレントな甘え行動思考
⑥拒否・回避的甘え行動思考

上記の尺度構成に基づき甘え欲求尺度 7 項目、甘え受容予測 8 項目、甘え抵抗感尺度 5 項目、甘え行動思考尺度 1 項目、アンビバレントな甘え行動思考尺度 1 項目、拒否・回避的甘え行動思考尺度 1 項目を加えた、計 20 項目からなる甘え尺度を作成した。さらに、表記の適切性を検討するために、心理学を専攻する大学院生 5 名に数回にわたって検討を依頼し尺度を作成した。

本調査

1. 目的

予備調査を基に作成した甘え尺度の信頼性と妥当性を検討し尺度を完成させることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象

大阪府内の私立大学生を調査対象とした。有効回答が得られた 125 名（男性 49 名、女性 76 名、平均年齢 19.3、標準偏差 1.65）を分析対象とした。

(2) 調査期間

調査は 2003 年 10 月初旬に行った。

(3) 調査内容

予備調査で作成した甘え尺度を用いた。無記名で行い、評定は 6 件法とした。また、提示順序による評定の歪みを避けるために提示順序をランダムに組み替え、系列位置効果を相殺した。

(4) 手続き

一定条件で行うために、教示をあらかじめ決めた上で、講義時間を利用し実施した。

3. 結果及び考察

(1) 主成分分析による一次元性の検討

構成した尺度の一次元性を検討するために、各状況の尺度毎に主成分分析を行った。その結果、状況 A・対象：友達、状況 B・対象：親友、状況 C・対象：母親、条件 D・対象：父親、状況 E・対象：恋人の 5 状況の全ての尺度において一次元構造を確認した。

(2) 項目分析

作成した尺度の項目を分析するために G–P 分析を行い、尺度の有効性を検討した。まず。逆転項目を反転し、項目の合計得点を尺度得点とし、その尺度得点の上位 25% までにある被験者を上位群、下位 25% にある被験者を下位群として各尺度構成項目について t 検定を行った。その結果、全ての項目において 0.1% 水準の有意差がみられ、尺度内の他項目との等質性が示唆されたため全項目を採用した。

(3) 信頼性の検討

尺度の信頼性を吟味するため、クロンバックの α 係数を求めた。甘え欲求の α 係数は .80 〜.91、対象の受容の予測の α 係数は .80 〜.86、甘えることへの抵抗感の α 係数は .75 〜.85 であり、内的一貫性が認められた（表 1）。

表 1　各尺度の信頼係数　α 係数

尺度名	甘え状況				
	状況A（友達）	状況B（親友）	状況C（母親）	状況D（父親）	状況E（恋人）
甘え欲求	.87	.83	.91	.89	.80
甘え受容の予測	.83	.83	.86	.84	.80
甘え抵抗感	.75	.82	.81	.81	.85

研究Ⅱ　甘えの心理の分析

1. 目的

研究Ⅱでは、研究Ⅰで作成した甘え尺度を用いて、各状況の尺度毎の性差と状況による「甘え」の心理の違いと、尺度間の関連を検討することとする。さらに得られた結果を基に、甘え欲求から甘えの行動思考に至るまでの因果モデルを検討することを目的とする。

(1) 甘え因果モデルについて

加藤（2000）の「甘え交流の過程モデル」では、甘え行動に至るまでの過程を「甘え欲求」、「行為前モニタリング段階」、「行為中モニタリング段階」、「行為後モニタリング段階」に分類し、甘え行動・甘え交流の内的作業モデルを検討している。甘え行動に至るまでには基本的に、「甘え欲求」、「行為前モニタリング段階」を経る。すなわち、甘え欲求が甘え行動に変換されるためには甘え欲求の活性化、次に自己（甘える側）、相手（甘えさせてくれる側）、両者の関係、そして状況に関する情報を基に査定し、モニターする。この時、甘え行動がうまくいきそうな場合は、甘えたときの満足感や一体感を、拒絶されそうなときには抵抗感や不安が喚起される。そして、これらの情報を基に実際の甘え行動に至るか否かの決断を下す、としている。

本研究では、これらの理論を踏まえて新たに設定した因果モデルを図 1 で示す。甘え欲求、

モニタリング段階、行動思考から成り、モニタリング段階では、甘え受容予測尺度と甘え抵抗感尺度、行動思考は甘え行動思考尺度、アンビバレントな甘え行動思考、甘え拒否・回避的行動思考尺度を用いる。また、先行研究では、甘えには性差が認められていることから（藤原・黒川 1981、外山・高木 1991）、男女別で検討することにする。

次に、甘えの行動思考に影響を与える諸要因の関連について検討する。まず外生変数として甘え欲求を仮定する。そして、甘え欲求に影響を受ける内生変数として、甘え受容予測と甘え行動思考、甘え拒否・回避的行動思考を仮定する。甘え欲求が高められた場合、直接甘え行動思考に影響を与えると考えられる。また、甘え欲求が活性化されると、相手が甘えられるかどうかのモニタリングが活発になるだろう。甘え欲求が表出されない場合は、甘えることを必要としないため、モニタリングする必要もなく、直接甘え欲求から甘え拒否・回避的行動思考に影響を与えるだろう。

甘え受容予測に影響を受ける内生変数として、甘え行動思考と甘え抵抗感を仮定する。甘える対象が甘えられると予測した時、甘え行動思考に影響を与えるだろう。また、甘え受容予測が高まると、甘えることに対する抵抗感が弱められると考えられる。

次に、甘え抵抗感の影響を受ける内生変数として甘え行動思考、アンビバレントな甘え行動思考、甘え拒否・回避的行動思考を仮定する。甘えることの抵抗感が弱い場合、甘えに対して肯定的になり甘え行動を起こす傾向が高まり、アンビバレントな甘え行動思考、甘え拒否・回避的行動思考といった否定的な甘え行動思考は弱められるだろう。以上の因果モデルを仮定し、検討していくこととする（図 1）。

2. 方法

（1）調査対象

大阪府内の私立大学生 1～4 回生を対象に調査を行った。有効回答が得られた 403 名（男性 150 名、女性 253 名、平年齢 20.08、標準偏差 1.50）を分析対象とした。

（2）調査期間

調査は 2003 年 11 月初旬に行った。

（3）調査内容

研究Ⅰで作成した甘え尺度を用いた。尺度は①甘え欲求、②対象の甘え受容予測、③甘え抵抗感、④甘え行動思考、⑤アンビバレントな甘え行動思考、⑥甘え拒否・回避的行動思考、から成り 6 件法で評定を求めた。また、提示順序による評定の歪みを避けるために提示順序をランダムに組み替え、系列位置効果を相殺した。

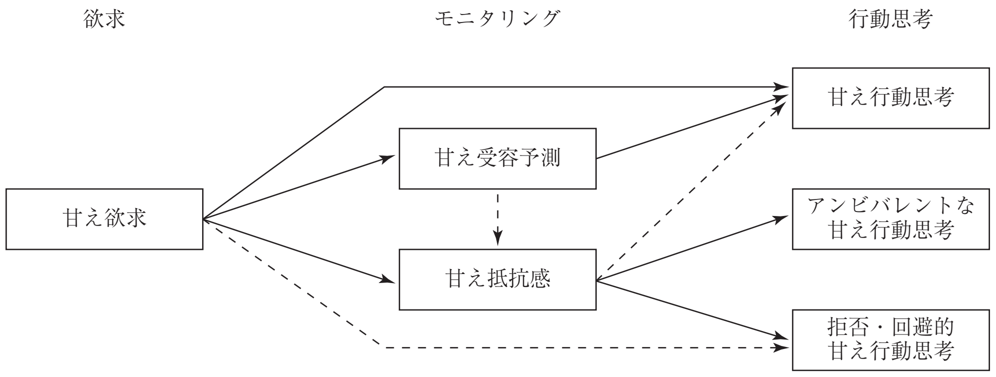

図 1　甘え因果モデル
注：実線の矢印は正の影響を、点線の矢印は負の影響をそれぞれ表す。

(4) 手続き

一定条件で行うために、教示をあらかじめ決めた上で、講義時間を利用し実施した。

3. 結果

まず、総計的分析を行う前に天井効果とフロア効果を調べた。その結果、どの尺度においても天井効果、フロア効果は見られなかった。

(1) 各甘え尺度における性差の検討

①各尺度の性差

各状況の尺度、すなわち甘え欲求、甘え受容予測、甘え抵抗感、甘え行動思考、アンビバレントな甘え行動思考、甘え拒否・回避的行動思考の項目得点を基に、性差を検討するために t 検定を行った。その結果、甘え欲求尺度、甘え受容予測尺度で性差が見られ（順に、t＝5.47, df＝401, p＜.001；t＝3.00, df＝401, p＜.001）、女性のほうが有意に得点が高かった。甘え抵抗感尺度では有意差が認められなかった（t＝1.79, df＝401）。行動思考では甘え行動思考尺度で有意差が認められ（t＝4.37, df＝401, p＜.001）、女性のほうが得点が高かった。アンビバレントな甘え行動思考尺度、甘え拒否・回避的行動思考尺度で有意な差が見られ（順に、t＝4.34, df＝401, p＜.001；t＝2.50, df＝401, p＜.05）、男性のほうが有意に得点が高かった。

これらのことから、甘え欲求や対象が甘えを受け入れてくれるだろうという予測においては性差が認められ、女性のほうが甘えの表出が高いが、甘え抵抗感では男女共に同じように抵抗感を抱いていることが明らかになった。また、行動思考では、実際に甘え行動に移そうと思考することにおいては、女性の方が高く、アンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的甘え行動思考といった甘えに否定的な行動を起こすのは、男性のほうが高いということが明らかになった。尺度に性差が認められたため次に、状況別で各尺度の性差を検討した（表 2）。

②甘え欲求の性差

各状況の甘え欲求の性差を検討するために t 検定を行った結果、状況 A・対象：友達では有意差が認められず（t＝0.45, df＝401）、友達においては男女ともに同じような甘え欲求を抱いていた。状況 B・対象：親友（t＝4.10, df＝401, p＜.001）、状況 C・対象：母親（t＝5.42, df＝268.98, p＜.001）、状況 D・対象：父親（t＝6.04, df＝401, p＜.001）、状況 E・対象：恋人（t＝3.80, df＝401, p＜.001）においては 0.1％水準で女性の方が有意に得点が高かった（表 3）。

③甘え受容予測の性差

各状況の甘え受容予測の性差を検討するために t 検定を行った。その結果、状況 A・対象：友達（t＝1.23, df＝401）、状況 E・対象：恋人（t＝0.45, df＝401）では有意差が認められなかった。このことから、友達がなんとかしてくれるだろう、という道具的甘え欲求場面と、恋人は自分のことを受け入れてくれるだろうという情緒的な甘え欲求場面では男女同じように甘えを受け入れてくれるだろうと予測しているという結果が得られた。また、状況 B・対象：親友（t＝3.77, df＝401, p＜.001）、状況 C・対象：母

表 2　甘え尺度における性差　平均（標準偏差）

尺　　度	男性（n＝150）	女性（n＝253）	t 値
甘え欲求	138.78（24.14）	152.42（24.27）	5.47***
甘え受容予測	167.04（22.07）	173.62（20.79）	3.00**
甘え抵抗感	85.37（18.46）	82.02（18.04）	1.79
甘え行動思考	20.21（ 3.99）	21.94（ 4.02）	4.37***
アンビバレントな甘え行動思考	17.00（ 3.90）	15.87（ 1.44）	2.74**
甘え拒否・回避的行動思考	17.13（ 4.40）	16.00（ 4.38）	2.50*

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

表3　甘え欲求の性差　平均（標準偏差）

甘え状況・対象	男性(n＝150)	女性(n＝253)	t 値
状況 A・対象：友達	30.73(6.75)	30.45(5.90)	0.45
状況 B・対象：親友	27.15(6.08)	29.77(6.15)	4.10***
状況 C・対象：母親	25.53(8.08)	29.79(6.69)	5.42***
状況 D・対象：父親	27.59(7.25)	31.95(6.85)	6.04***
状況 E・対象：恋人	27.78(7.01)	30.34(6.21)	3.80***

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

表4　甘え受容予測の性差　平均（標準偏差）

甘え状況・対象	男性(n＝150)	女性(n＝253)	t 値
状況 A・対象：友達	32.53(5.45)	31.80(5.88)	1.23
状況 B・対象：親友	35.32(5.61)	37.49(5.56)	3.77***
状況 C・対象：母親	32.18(6.95)	34.13(6.66)	2.78**
状況 D・対象：父親	33.47(6.85)	36.39(6.72)	4.17***
状況 E・対象：恋人	33.54(5.87)	33.82(5.76)	0.46

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

表5　甘え抵抗感の性差　平均（標準偏差）

甘え状況・対象	男性(n＝150)	女性(n＝253)	t 値
状況 A・対象：友達	17.23(4.70)	18.84(4.30)	3.52***
状況 B・対象：親友	16.32(5.16)	15.37(5.09)	1.79
状況 C・対象：母親	16.95(5.20)	15.09(5.12)	3.51***
状況 D・対象：父親	17.35(5.19)	15.00(5.02)	4.47***
状況 E・対象：恋人	17.52(5.22)	17.71(5.06)	0.39

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

親（t＝2.78, df＝401, p＜.01）、状況 D・対象：父親（t＝4.17, df＝401, p＜.001）おいては0.1％水準で女性の方が有意に得点が高かった（表4）。

④甘え抵抗感の性差

各状況の甘え抵抗感の性差を検討のためにt検定を行った結果、状況 A・対象：友達では女性のほうが得点が有意に高かった（t＝3.52, df＝401, p＜.001）。状況 B・対象：親友、状況 E・対象：恋人では有意差は見られなかった。状況 C・対象：母親（t＝3.51, df＝401, p＜.001）、状況 D・対象：父親（t＝4.47, df＝401, p＜.001）では男性のほうが有意に得点が高かった（表5）。以上のことから、女性は友達に対しての道具的欲求場面では男性よりも甘えられないという気持ちを抱いていた。また、母親に対する道具的甘え欲求場面、父親に対する道具的甘え欲求場面では男性のほうが甘えることに抵抗感を感じているという結果が得られた。

⑤甘え行動思考の性差

各状況の甘え行動の思考の性差を検討するためにt検定を行った。その結果、状況 A・対象：友達、状況 E・対象：恋人では男女差が見られなかった。状況 B・対象：親友（t＝4.23, df＝401, p＜.001）、状況 C・対象：母親（t＝4.17, df＝272.35, p＜.001）、状況 D・対象：父親（t＝4.17, df＝272.35, p＜.001）では0.1％水準で有意に女性の方が得点が高かった（表6）。これらの結果から、友達に対する道具的甘

表 6　甘え行動思考の性差　平均（標準偏差）

甘え状況・対象	男性(n＝150)	女性(n＝253)	t 値
状況 A・対象：友達	5.19(0.98)	5.08(0.93)	1.1
状況 B・対象：親友	3.79(1.41)	4.36(1.22)	4.26***
状況 C・対象：母親	3.69(1.67)	4.37(1.41)	4.17***
状況 D・対象：父親	3.28(1.56)	4.91(1.29)	4.63***
状況 E・対象：恋人	3.33(1.54)	3.23(1.38)	0.66

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

表 7　アンビバレントな甘え行動思考の性差　平均（標準偏差）

甘え状況・対象	男性(n＝150)	女性(n＝253)	t 値
状況 A・対象：友達	2.85(1.24)	2.99(1.16)	1.13
状況 B・対象：親友	3.49(1.24)	3.06(1.29)	3.33**
状況 C・対象：母親	3.36(1.46)	3.06(1.34)	2.07*
状況 D・対象：父親	3.28(1.39)	2.60(1.23)	5.10***
状況 E・対象：恋人	4.01(1.51)	4.17(1.33)	0.66

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

表 8　拒否・回避的甘え行動思考の性差　平均（標準偏差）

甘え状況・対象	男性(n＝150)	女性(n＝253)	t 値
状況 A・対象：友達	2.77(1.38)	2.91(1.21)	1.08
状況 B・対象：親友	3.63(1.58)	3.25(1.39)	2.39*
状況 C・対象：母親	3.61(1.54)	3.07(1.48)	3.50**
状況 D・対象：父親	3.37(1.60)	2.74(1.35)	4.02***
状況 E・対象：恋人	3.75(1.50)	4.02(1.44)	1.74

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

え欲求場面、恋人に対する情緒的甘え欲求場面では男女に差はなく、親友に対する情緒的甘え欲求場面、母親に対する経済的甘え欲求場面、父親に対する道具的甘え欲求場面では、女性のほうが有意に甘え行動を考えていることが示された。

⑥アンビバレントな甘え行動思考の性差

各状況のアンビバレントな甘え行動思考の性差を t 検定により検討した。その結果、状況 A・対象：友達、状況 E・対象：恋人では性差が見られなかったが、状況 B・対象：親友（t＝3.33, df＝401, p＜.01）、状況 C・対象：母親（t＝2.07, df＝401, p＜.05）、状況 D・対象：父親（t＝5.10, df＝401, p＜.001）では有意に男性の方が得点が高かった（表 7）。これらのことから、友達に対する道具的甘え欲求場面、恋人に対する情緒的甘え欲求場面では男女差はなかったが、親友に対する情緒的甘え欲求場面、母親に対する道具的甘え欲求場面、父親に対する道具的甘え欲求場面では、男性のほうがアンビバレントな気持ちを抱いていることが示された。

⑦拒否・回避的甘え行動思考の性差

各状況の拒否・回避的甘え行動思考の性差を検討するために t 検定を行った。その結果、状況 A・対象：友達、状況 E・対象：恋人では性差が見られなかったが、状況 B・対象：親友（t＝2.40, df＝282.35, p＜.05）、状況 C・対象：母親（t＝3.50, df＝401, p＜.01）、D 状況・対象：父親（t＝4.02, df＝272.65, p＜.001）、において男性のほうが有意に得点が高かった（表

8）。この結果から、友達に対する道具的甘え欲求場面、恋人に対する情緒的甘え欲求場面では男女に差がなく、親友に対する情緒的甘え欲求場面、母親に対する道具的甘え欲求場面、父親に対する道具的甘え欲求場面では、女性のほうが拒否・回避的甘え行動を示すことがわかった。

（2）各状況間の差

各状況による甘え欲求、甘え受容予測、甘え抵抗感、甘え行動思考、アンビバレントな甘え行動思考、甘え拒否・回避行動思考の差を見るために 1 要因分散分析を行った。なお、本研究の多重比較には全て LSD 法（有意水準 5%）を用いた。

①各状況による甘え欲求の差

分散分析の結果、男性で有意な差が見られた（F＝15.84, df＝4, p＜.01）。多重比較によると、状況 A・対象：友達＞状況 E・対象：恋人＝状況 D・対象：父親＝状況 B・対象：親友＞状況 C・対象：母親となり、状況 A・対象：友達がその他よりも有意に得点が高く、状況 E・対象：恋人、状況 D・対象：父親、状況 B・対象：親友が状況 C・対象：母親よりも有意に得点が高かった（Mse＝33.68）。

女性でも有意な差が見られ（F＝9.26, df＝4, p＜.01）、多重比較の結果、状況 D・対象：父親＞状況 A・対象：友達＝状況 E・対象：恋人＝状況 C・対象：母親＝状況 B・対象：親友となり、状況 D・対象：父親がその他の状況・対象よりも有意に得点が高かった（Mse＝21.61）。

以上のことから、男性は友達に対する道具的甘え欲求場面で、他の 4 状況よりも甘え欲求が高く表出し、女性は父親に対する道具的甘え欲求場面で、他の 4 状況よりも甘え欲求が高く表出することが認められた（表 9）。

②各状況による甘え受容予測の差

分散分析の結果、男性で有意差が見られた（F＝9.45, df＝4, p＜.01）。多重比較の結果、状況 B・対象：親友が他の状況・条件よりも有意に得点が高く、状況 C・対象：母親が状況 D・対象：父親、状況 E・対象：恋人よりも得点が高かった（Mse＝23.66）。

女性でも有意差が見られ（F＝49.79, df＝4, p＜.01）。多重比較の結果、状況 A・対象：友達が他の状況よりも有意に得点が低かった（Mse＝25.63）。また、状況 B・対象：親友がその他の状況・条件よりも有意に得点が高かった。ことから、男性は親友に対しての情緒的甘え欲求場面での甘え受容予測が他の 4 状況の中で最も高く、女性は友達に対しての道具的甘え欲求場面においては他の状況・条件よりも低く甘えの受容の予測をしていることが明らかになった。また男女共に状況 B の得点が高いことから、親友には自分を受け入れてくれるという予測が高まりやすいということが示された（表 10）。

③各状況による甘え抵抗感の差

分散分析の結果、男性では有意な差が見られなかった（F＝2.11, df＝4）。女性では有意差が見られ（F＝32.27, df＝4, p＜.01）、多重比較の

表 9　各状況による甘え欲求　平均（標準偏差）

性別	状況 A 対象：友達	状況 B 対象：親友	状況 C 対象：母親	状況 D 対象：父親	状況 E 対象：恋人	状況別の甘え欲求得点 平均値の多重比較（LSD）	
男性	30.73 （6.75）	27.15 （6.08）	25.53 （8.08）	27.59 （7.25）	27.78 （7.01）	A＞B* A＞C* A＞D* A＞E*	B＞C* D＞C* E＞C*
女性	30.45 （5.90）	29.77 （6.15）	29.79 （6.69）	31.95 （6.85）	30.34 （6.21）	D＞A* D＞B*	D＞C* D＞E*

*p＜0.05

表 10　各状況による甘え受容予測　平均（標準偏差）

性別	状況 A 対象：友達	状況 B 対象：親友	状況 C 対象：母親	状況 D 対象：父親	状況 E 対象：恋人	状況別の甘え受容予測得点 平均値の多重比較（LSD）
男性 （n＝150）	32.53 （5.45）	35.32 （5.61）	32.18 （6.95）	33.47 （6.85）	33.54 （5.87）	B＞A*　B＞E* B＞C*　D＞C* B＞D*　E＞C*
女性 （n＝253）	31.80 （5.88）	37.49 （5.56）	34.13 （6.66）	36.39 （6.72）	33.82 （5.76）	B＞A*　B＞D* C＞A*　B＞E* D＞A*　C＞D* E＞A*　C＞E* B＞C*

*p＜0.05

表 11　各状況による甘え抵抗感　平均（標準偏差）

性別	状況 A 対象：友達	状況 B 対象：親友	状況 C 対象：母親	状況 D 対象：父親	状況 E 対象：恋人	状況別の甘え抵抗感得点 平均値の多重比較（LSD）
男性 （n＝150）	17.23 （4.70）	16.32 （5.16）	16.95 （5.18）	17.35 （5.19）	17.52 （5.22）	
女性 （n＝253）	18.84 （4.29）	15.37 （5.09）	15.09 （5.11）	15.00 （5.02）	17.71 （5.06）	A＞B*　E＞B* A＞C*　E＞C* A＞D*　E＞D* A＞E*

*p＜0.05

結果、状況 A・対象：友達＞状況 E・対象：恋人＞状況 B・対象：親友＝状況 C・対象：母親＝状況 D・対象：父親となり、状況 A・対象：友達がその他の状況・対象よりも有意に得点が高かった（Mse＝14.14, p＜.05）。また、状況 E・対象：恋人が状況 B・対象：親友、状況 C・対象：母親、状況 D・対象：父親よりも有意に得点が高かった。これらのことから、男性は状況よる甘え抵抗感に有意な差が認められず、状況に関係なく甘えに対する抵抗感があることが認められた。また、女性は友達に対する道具的甘え、恋人に対する情緒的甘えに多くの抵抗感をもっていることが明らかになった（表 11）。

④各状況による甘え行動思考の差

分散分析の結果、男性で有意な差が見られ（F＝48.31, df＝4, p＜.01）、多重比較の結果、状況 A・対象：友達＞状況 B・対象：親友＝状況 C・対象：母親＝状況 E・対象：恋人＝状況 D・対象：父親となり（Mse＝1.87）、状況 A・対象：友達がその他の状況・条件よりも有意に得点が高かった。女性でも、有意差が見られ（F＝132.64, df＝4,p＜.01）、多重比較の結果、状況 A・対象：友達が状況 B・対象：親友、状況 C・対象：母親、状況 E・対象：恋人よりも有意に得点が高く、状況 D・対象：父親は状況 B・対象：親友、状況 C・対象：母親、状況 E・対象：恋人よりも得点が有意に高かった（Mse＝1.26）。これらの結果から、男性は友達に対する道具的甘え欲求が最も甘え行動思考が高まり、女性では、友達に対する道具的甘え欲求、恋人に対する情緒的甘え欲求がその他の状況・対象よりも有意に甘え行動思考が高まることが示された（表 12）。

表 12　各状況による甘え行動思考　平均（標準偏差）

性別	状況 A 対象：友達	状況 B 対象：親友	状況 C 対象：母親	状況 D 対象：父親	状況 E 対象：恋人	状況別の甘え行動思考得点 平均値の多重比較（LSD）	
男性 （n＝150）	5.19 （0.98）	3.79 （1.41）	3.69 （1.67）	3.28 （1.56）	3.33 （1.54）	A＞B* A＞C* A＞D* A＞E*	B＞D* B＞E* C＞D* C＞E*
女性 （n＝253）	5.08 （0.93）	4.36 （1.22）	4.37 （1.41）	4.91 （1.29）	3.23 （1.38）	A＞B* A＞C* A＞E* B＞E*	C＞E* D＞B* D＞C* D＞E*

*p＜0.05

表 13　各状況によるアンビバレントな甘え行動思考　平均（標準偏差）

性別	状況 A 対象：友達	状況 B 対象：親友	状況 C 対象：母親	状況 D 対象：父親	状況 E 対象：恋人	アンビバレントな甘え行動思考 得点平均値の多重比較（LSD）	
男性 （n＝150）	2.85 （1.24）	3.49 （1.24）	3.36 （1.46）	3.28 （1.39）	4.01 （1.51）	B＞A* C＞A* D＞A* E＞A*	E＞B* E＞C* E＞D*
女性 （n＝253）	2.99 （1.16）	3.06 （1.29）	3.06 （1.34）	2.60 （1.23）	4.17 （1.33）	A＞D* B＞D* C＞D* E＞A*	E＞B* E＞C* E＞D*

*p＜0.05

⑤各状況によるアンビバレントな甘え行動思考の差

分散分析の結果、男性で有意な差が見られ（F＝16.52, df＝4, p＜.01）、多重比較の結果、状況 E・対象：恋人＞状況 B・対象：親友＝状況 C・対象：母親＝状況 D・対象：父親＞状況 A・対象：友達となり（Mse＝1.61）、状況 E・対象：恋人がその他の状況よりも有意に得点が高く、状況 E・対象：恋人、状況 B・対象：親友、状況 C・対象：母親、状況 D・対象：父親が有意に状況 A・対象：友達よりも得点が高かった。女性でも、有意差が見られ（F＝71.08, df＝4, p＜.01）、多重比較の結果、状況 E・対象：恋人がその他の状況よりも有意に得点が高く、状況 D・対象：父親がその他の状況・対象よりも有意に得点が低かった（Mse＝1.22）。以上のことから、男女共に恋人に対する情緒的甘え欲求場面では、他の状況よりもアンビバレントな甘え行動思考が高まるということが認められた（表 13）。

⑥各状況による拒否・回避的甘え行動思考の差

分散分析の結果、男性で有意な差が見られ（F＝12.11, df＝4, p＜.01）、多重比較の結果、状況 E・対象：恋人＝状況 B・対象：親友＝状況 C・対象：母親＝状況 D・対象：父親＞状況 A・対象：友達となり（Mse＝1.92）、状況 A・対象：友達がその他の状況よりも有意に得点が低く、それ以外の状況では有意差が見られなかった。女性でも、有意差が見られ（F＝43.64, df＝4, p＜.01）、多重比較の結果、状況 E・対象：恋人がその他の状況よりも有意に得点が高かった（Mse＝1.41）。これらの結果から、男性は友達に対する道具的欲求場面において有意に拒否・回避的甘え行動思考が低まり、女性

表 14　各状況による拒否・回避的甘え行動思考　平均（標準偏差）

性別	状況 A 対象：友達	状況 B 対象：親友	状況 C 対象：母親	状況 D 対象：父親	状況 E 対象：恋人	状況別の甘え拒否･回避行動思考 得点平均値の多重比較(LSD)	
男性 （n＝150）	2.77 （1.38）	3.63 （1.58）	3.61 （1.54）	3.37 （1.60）	3.75 （1.50）	B＞A* C＞A* D＞A*	E＞A* E＞D*
女性 （n＝253）	2.91 （1.21）	3.25 （1.39）	3.07 （1.48）	2.74 （1.35）	4.02 （1.44）	B＞A* B＞D* C＞D* E＞A*	E＞B* E＞C* E＞D*

*p＜0.05

では恋人対する情緒的甘え欲求場面において他の状況よりも拒否・回避的甘え行動思考が高まるということが示された（表 14）。

(3)　甘え因果モデルの検討

各状況の尺度項目、すなわち甘え欲求、甘え受容予測、甘え抵抗感、甘え行動思考、アンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的な甘え行動思考の各尺度項目を合計し、甘え欲求の表出から行動思考までの因果モデルを検討するために男女別にパス解析を行った（図 2、図 3）。パス係数の推定は重回帰分析を用いた。パス解析の結果を図 2、3 に示す。図中の数字は 5% 水準で有意であったパス係数（標準偏回帰係数）の値である。まず、男性のパス係数を見ていく。甘え受容予測に対して甘え欲求（β ＝.34, p＜.001）から正のパスが認められた。甘え抵抗感に対して甘え受容予測（β ＝－.43, p＜.001）から負のパスが認められた。甘え行動思考に対して甘え欲求（β ＝.61, p＜.001）と甘え受容予測（β ＝.16, p＜.05）からの正のパス、甘え抵抗感（β ＝－.14, p＜.05）から負のパスが認められた。アンビバレントな甘え行動思考に対して甘え抵抗感（β ＝.52, p＜.001）からの正のパスが認められた。拒否・回避的な甘え行動思考に対して甘え抵抗感（β ＝.55, p＜.001）からの正のパス、甘え欲求からの負のパス（β ＝－.17, p＜.05）が認められた。

次に、女性のパス係数を検討すると、甘え受容予測に対して甘え欲求（β ＝.32, p＜.001）から正のパスが認められた。また、甘え抵抗感に

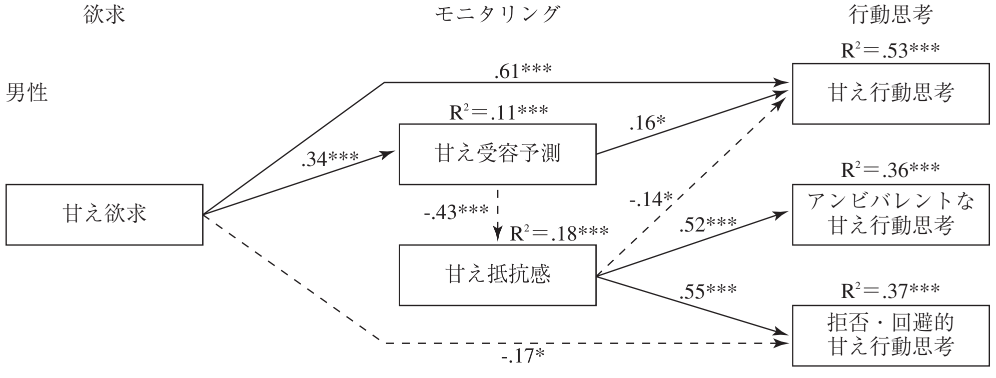

図 2　男性の甘え因果モデルの重回帰分析の結果
注：*p＜0.05, **p＜0.01。図中の数値は標準回帰係数である。但し、R^2 は重決定係数を示す。実線の矢印は正の影響を、点線の矢印は負の影響をそれぞれ表す。

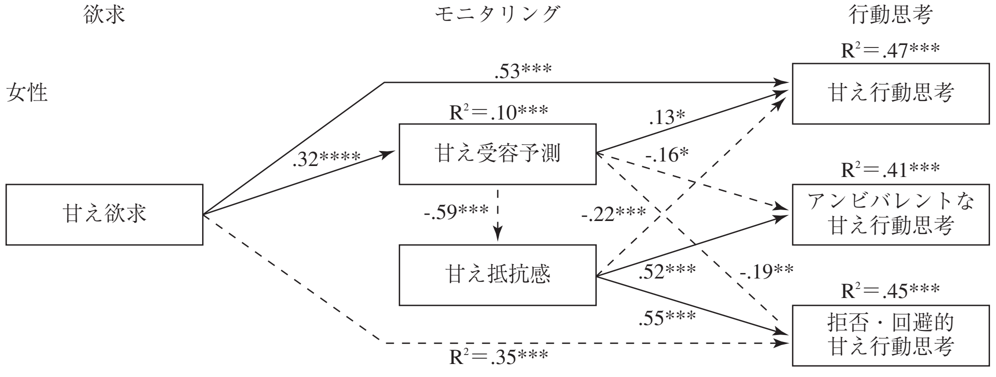

図 3　女性の甘え因果モデルの重回帰分析の結果
注：*p＜0.05, **p＜0.01。図中の数値は標準回帰係数である。但し、R^2 は重決定係数を示す。実線の矢印は正の影響を、点線の矢印は負の影響をそれぞれ表す。

対して甘え受容予測（β＝－.59, p＜.001）から負のパスが認められた。甘え行動思考に対して甘え欲求（β＝.53, p＜.001）と甘え受容予測（β＝.13, p＜.05）からの正のパス、甘え抵抗感（β＝－.22, p＜.001）から負のパスが認められた。アンビバレントな甘え行動思考に対して甘え受容予測（β＝－.16, p＜.05）からの負のパス、甘え抵抗感（β＝.52, p＜.001）からの正のパスが認められた。拒否・回避的な甘え行動思考に対して甘え欲求、甘え受容予測（順に β＝－.18, p＜.001, β＝－.18, p＜.01）からの負のパス、甘え抵抗感（β＝.55, p＜.001）からの正のパスが認められた。これらの結果から甘え欲求から甘え受容予測、そして甘え抵抗感から各行動思考への関連が示された。また、甘え欲求から直接甘え行動思考へとつながることも明らかにされた。

また、女性では甘え受容予測からアンビバレントな甘え行動思考、甘え受容予測から拒否・回避的甘え行動思考との関連が認められた。

4. 考察

(1) 甘えの心理と性差について

本研究の目的は、甘えの心理、性差を多面的に分析し、そして甘えの因果モデルを検討することであった。まず、甘えの心理と性差について検討する。

甘え欲求、甘え受容予測は男性よりも女性の方が強く、甘えの抵抗感については性差がなかった。また、女性は男性よりも状況・対象により甘え受容予測が異なるという結果が得られた。さらに、状況・対象間における甘え抵抗感について分析したところ、女性は状況・対象により抵抗感が異なるのに対し、男性ではどの状況・対象においても変化が見られなかった。また行動思考では、甘え行動思考得点が女性のほうが有意に高かったことから、女性は男性よりも甘え行動を起こしやすいことが示された。男性は女性よりもアンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的甘え行動思考の得点が有意に高かったことから、女性よりも甘えることに対して否定的な考え、拒否、回避的行動をとったり、甘えたい気持ちを抑制し甘えられないでいることが示された。

これらのことから、女性は状況や対象との関係性を基に甘えられるかどうかをモニタリングし、甘えるかどうかの判断は外的基準を基にしていると考えられる。一方、男性は、周りの状況や相手で判断するのではなく、自己の基準に照らし合わせて甘えるかどうかを判断し、内的基準を基としていると考えられる。外山・高木（1991）によると、女子は、甘えられるかどうかは他者基準、男子は自己基準に影響されていると報告しており、本研究の考えを支持するも

のといえよう。

甘え欲求、甘え受容予測の性差については女性の方が高いという結果が得られ、外山・高木（1991）の研究によっても支持されるものであった。甘えに関する価値観については、女性の方が肯定的に捉えており（外山・高木、1991）、また、その背後にあると考えられる甘えに対する基本的な考え方・姿勢、すなわち甘え観も男性よりも女性の方が高いという研究結果も報告されていることから（加藤、1999）、本研究の結果を支持するものといえよう。

しかし、状況・対象別に詳しく検討した結果、友達の道具的サポートを求める甘え場面での甘え欲求、甘え受容予測、行動思考では性差が見られず、甘え抵抗感は男性よりも女性のほうが高かった。さらに、性別で見ると、この状況における男性の甘え欲求は、提示した5状況のなかで最も得点が高かった。また、女性のこの状況・対象における甘え抵抗感は、他の状況と比べ最も高く、甘え受容予測の得点は最も低かった。つまり、行動の上では性差が見られず、男女とも同じように友達に甘えたいという気持ちがあるが、女性は自分の甘えを受容してくれるという予測が低く、友達には甘えられないという抵抗感を高くもっており、甘えることに対するネガティブな感情が男性よりも内在化されていることが示唆された。

青年期において、友人関係は大変重要な対人関係のひとつであり、「互いの社会－情緒的目的を促進しようと意図し、友好、親密さ、感情、相互扶助の様々なタイプと程度を含む、時間にとらわれない二人の間の自発的な相互依存」であると言われている（和田、1993）。また、大学における友人は同じ立場で共感できる仲間であり、男女関係なく甘え欲求が表出しやすい対象であるといえるであろう。

男性がこの状況において最も甘え欲求が高く、女性で甘え抵抗感が高く、甘え受容予測が低かったことに関しては、男女の交友関係の違いによるものだと考えられる。Glombok & Fivush（1994）によると青年期における交友関係について、女子青年は男子青年よりも、仲間集団の人間関係における問題に対して傷つきやすいと述べており、男女の交友関係の特徴として、女性は男性と比べ、より深い、より親密な交友関係を持ち、そのような交友関係では、個人的問題や感情について話し合うことが多い。これとは対照的に、男性は同じ趣味から交友関係を作り上げていくものと思われるが、時間の大半はこのような互いの趣味を満たすことに使われる、としている。

また、Maccoby（1990）の研究によると、女性は信頼の共有や協調を重視し情緒的であり、男性は友人関係に関して、支配や地位を重視し手段的であると報告されており、交友関係における男女の特徴を一言で言うと、「男性は道具的な結びつきが強く、女性は情緒的な結びつきが強い」といえるであろう。

これらのことを考えると男性にとって友達は、道具的な甘え欲求にはあまり抵抗感を感じることなく甘えられ、女性は道具的な甘え欲求を友達に求める場合、関係が悪化しないだろうかという気持ちから、甘えることに対して否定的な感情が高まると考えられる。しかし、これらのことを明言するためには同一対象に対して道具的甘え欲求場面、情緒的甘え欲求場面の2つの状況を提示し、詳しく検討していく必要があるだろう。

父親および母親に対して道具的サポートを求める甘え欲求場面において、甘え欲求、甘え受容予測は女性の方が高く、甘え抵抗感は男性のほうが高かった。性別で見ると、男性は母親に道具的サポートを求める甘え状況において、他の状況よりも有意に得点が低く、女性は父親に道具的サポートを求める甘え状況では有意に他の状況よりも得点が高かった。母親に対する甘えの刺激文の内容は金銭的なサポートを求める場面であったが、大学時代において、自分が自由に使える金を得るために多くの学生がアルバイトなどをしており、これらの経験は経済的、

社会的な自立を志向するきっかけになると考えられる。男性は、将来家庭を持ち、家族を養うために社会に出て働かなければならないという意識が高いだろう。そのため、経済的な道具的サポートに関しては自分で何とかしなければならないという考えが強いと考えられる。

女性で、父親の道具的サポートを求める状況で甘え欲求と甘え行動思考が高かったことに関しては、父親の養育の役割として、家庭と社会を結びつけるといった道具的な役割を負っているという指摘もあることから（Parsons & Bales, 1956； Parsons 1963）、幼少期から父親から道具的なサポートを多く受けていると考えられ、甘え欲求が表出しやすかったと考えられるが、本研究の対象は大学生のみとしており、この問題の内容を明らかにするには、発達段階の初期からの父親、母親の養育態度について詳しく検討する必要があるだろう。

次に、親友、恋人に対する情緒的な甘え欲求場面では、女性のほうが甘え欲求が高かった。また、親友における甘え受容予測も女性のほうが高かった。しかし、恋人の甘え受容予測と 3 つの行動思考に性差は認められず、男女共にアンビバレントな行動思考が他の状況・対象と比べ有意に高かった。つまり、恋人に対して甘えたいという欲求は女性の方が強いが、甘えたいが甘えられないというアンビバレントな気持ちは男女ともに強いことがわかった。これらの結果には、男女の人間関係における価値観の違いがか関連していたと思われる。

交友関係における女性の特徴として、男性よりも個人的な問題や感情について話し合うことが多く（Glombok & Fivysh, 1994）、また「女性は親友に物事について同じように感じてくれる人（情緒的）を求めるのに対し、男性は同じ事をするのが好きな人（手段的）を親友として求める」（和田、1996）とされており、交友関係におけるこういった男女の考えの違いが甘えに影響することが示唆された。

恋人においてアンビバレントな行動思考が高かったことに関しては、恋愛は相互的な関係であり、男女共に、恋人には情緒的なつながりや親密な関係性を保持しようとする気持ちが高いと考えられる。そのため、お互いの関係を良好に保とうとする気持ちが強く、甘えることに対して葛藤が生じやすいと考えられる。

(2) 甘え因果モデルについて

重回帰分析の結果、甘え欲求が直接、甘え行動思考に関連する傾向が見られた。つまり、甘えたいという欲求の強さが、甘え行動思考に影響を与えることが示された。また、甘え欲求と拒否・回避的甘え行動思考との関連も見られ、甘え欲求が強い場合、甘えを拒否または回避するような行動を思考することが低くなることがわかり、仮説が支持された。

甘え欲求と甘え受容予測の関連では、甘え欲求の強さが甘え受容予測に影響を与えていることが示唆された。甘え受容予測と甘え行動思考との関連では、対象が甘えを受容してくれるだろうという予測が、甘え行動思考に影響を与えているということが示唆された。また仮説で予測されなかったこととして、女性にのみ「甘え受容予測→アンビバレントな甘え行動思考」、「甘え受容予測→拒否・回避的甘え行動思考」との関連が見られ、甘えの因果モデルに性差があることが示された。つまり女性の場合、甘え受容予測が高くなると、アンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的甘え行動思考といった甘えることに否定的な行動思考を低めるということが示され、甘え受容予測が甘えるか否かの基準の一つとなっていることが示唆された。

甘えの受容に関する外山・高木（1991）の考察によると、女性の「甘え」に関しては両親、周囲の人間、あるいは社会全体が比較的受容的とであると考えられ、甘えの受容予測に関しても肯定的である、としており、今回の研究結果ではこれらの考えからも支持されるものといえよう。

次に、甘え受容予測と甘え抵抗感に関連が見られたことについては、甘え受容予測が高まる

と、甘えることに対する抵抗感が低めることに影響を与えることが示され、仮説が支持された。また、甘え抵抗感については、「甘え抵抗感→甘え行動思考」、「甘え抵抗感→アンビバレントな甘え行動思考」、「甘え抵抗感→甘え拒否・回避行動思考」との関連が見られ、甘え抵抗感が低い場合、甘え行動思考の低さとアンビバレントな甘え行動思考、甘え拒否・回避行動思考の高さと関連しており、甘え抵抗感が行動思考に影響を与えることが明らかとなった。

5. 全体的考察と結論及び今後の課題

本研究では、研究Ⅰにより甘え尺度を作成し、研究Ⅱにより甘えの心理について検討を行った。

(1) 甘え尺度の作成について

予備調査と先行研究を参考に研究Ⅰにおいて甘え尺度を作成し、尺度の妥当性と信頼性が認められた。これまでの甘え尺度（藤原・黒川、1981；外山・高木、1991；加藤、2001）では、被験者に直接問いかける形式をとっており、社会的望ましさ（social desirability）がバイアスとして生じる可能性があった。

これらのことを踏まえ、今回作成した尺度では、物語提示という形式をとり、被験者と同性、同世代の架空の人物を設定し、被験者はその人物の身になって答えるという投影法的な手法を用いた。また、刺激文も予備調査で得られた甘えに関するエピソードを参考に、被験者が刺激文に共感でき、かつ自分のこれまでの体験を想起しやすいものにした。今回のこの新しい試みは、被験者の意識的なレベルに留まらず心理深層にもアプローチし、より本音に近い甘えの心理を測定する有効な手段であったと考える。今後はさらに検討を進めて、例えばP-Fスタディのような絵画投影法的な手法を用いて甘えを捕らえる方法が考案されてもいいだろう。

次に、今回用いた刺激文は大別して道具的甘え欲求場面、情緒的甘え欲求場面に分類することができるが、作成した甘え尺度はこれらの刺激文に対して対象が決まっていた。

今後は対象に対してさまざまな甘え欲求場面を提示することで、さらに詳細に甘えの心理を捉えることができ、対象に対してどのような甘え欲求が表出しやすいのかといったことも明らかになるだろう。

また、今回の研究の結果により甘え受容予測、甘え抵抗感が甘えに重要な役割を果たしていることが示唆されたため、今後はこれらの尺度をさらに検討することも重要であろう。

(2) 甘えの心理の分析について

研究Ⅱでは甘えの性差、状況による甘えの心理、甘え因果モデルの検討を行った。これまでの甘えの実証的研究（藤原・黒川、1981；外山・高木、1991）では女性の方が甘え欲求が高いと報告されており、本調査でも同じ結果が得られた。しかし、状況別に見ると友達に道具的なサポートを求める甘え欲求場面では甘え欲求、甘え受容予測に男女差が見られなかったことから対象、甘え欲求場面の内容によっては性差が見られなかったり、男性の方が甘え欲求が高くなる状況、対象がある可能性が示唆され、今後さらに検討する必要があるだろう。

また、外山・高木（1991）の研究では、甘えの抵抗感は男性の方が高いとされているが、今回の研究では性差が認められなかった。しかし、状況別に見ると、友達に道具的なサポートを求める甘え欲求場面では、女性の方が甘えの抵抗感が有意に高く、父親に対する道具的甘え欲求場面、母親に対する甘え欲求場面では男性の方が有意に甘え抵抗感が高かった。

さらに、男性は状況による甘え抵抗感に違いはなく、女性は状況に応じて甘え抵抗感が違うことがわかった。つまり、男性は自己基準として状況、対象に関係なく一定した甘えに対する抵抗感を持っており、女性は状況や対象に応じて甘えの抵抗感が変化することが示唆された。これらのことを明らかにするためには性別により親の養育がどのように違うのか、また、それ

により男女で甘え観に違いが生まれるかについても発達段階ごとに見る必要があるだろう。

次に、甘え因果モデルの検討ではほぼ仮説を支持する結果が得られたが、性差が認められ、女性において甘え受容予測からアンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的甘え行動思考との関連が見られたのに対し、男性ではこの関連が見られなかった。すなわち、男性はアンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的甘え行動思考といった甘える行動をとらない場合は、甘え抵抗感のみと関連している。一方、女性の場合は、甘えさせてくれるだろうという予測からもこの 2 つの行動思考と関連していることが明らかになり、女性において甘えの受容予測が甘えに関する行動に重要な役割を果たしているものと考えられる。

これらのことから、男性は甘える際、自己基準と照らし合わせ判断しており、女性は状況や対象を基に甘えるかどうかを判断することが示唆された。

今後残された因果モデルの課題として、行動思考を再検討することが挙げられるだろう。今回は一つの試みとして甘え行動思考、アンビバレントな甘え行動思考、拒否・回避的甘え行動思考の 3 つの行動思考を設定したが、甘えに関する行動としてその他にも考えられる余地があるだろう。また、今回の結果で状況、対象により性差にばらつきがあったことから、詳細な甘えの心理を見るために状況や対象をさらに増やし、状況別または対象別でさらに詳しく検討する必要もあるだろう。

甘えの因果モデルに性差が見られたことに関しては、男女で甘えのメカニズムに違いがあることが示唆されたため、今後はさらにその違いについて詳しく検討することも重要であろう。また、甘えをタイプ別に分類する試みもあっても良いだろう。

本研究の目的は、大学生を対象とした甘えの心理の分析であり、この目的は達成できたと考える。今後は、発達段階ごとに「甘え」を見ていき、それぞれの段階での甘えについて、例えばジェンダーとしての甘え、ソーシャルサポートからの甘えの検討、ライフサイクルとしての甘え、といった視点からもアプローチしていくことも必要であろう。

引用文献・参考文献

阿久津景子　2001「日本人の〈甘え〉を知る－心理療法の場における〈甘え〉の考察を通じて－」和光大学　卒業論文

穴田義孝（編）1998「日本人の社会心理」人間の科学者

土居健郎　1971『「甘え」の構造』弘文堂

土居健郎　1975『「甘え」の雑稿』弘文堂

土居健郎　1987『「甘え」の周辺』弘文堂

土居健郎　1988「「甘え」理論再考－竹友安彦氏の批判に答える－」『思想』, 711, 99–118.

土居健郎　1995『「甘え」の思想』弘文堂

榎本淳子　2000「青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連」教育心理学研究、48, 444–453

遠藤辰夫（編）1976「青年心理学」峯書房

藤堂明保（編）1999「新版　漢字源」

Frank A. Johnson. M. D, 1993 *Dependency and Japanese Socialization*. New York University Press

フランク A. ジョンソン（著）江口重幸・五木田紳（共訳）1997「「甘え」と依存－精神分析学的人類学的研究－」弘文社（Frank A. Johnson. M. D, 1993 *Dependency and Japanese Socialization*. New York University Press）

藤原武弘・黒川正流（1981）「対人関係における「甘え」についての実証的研究」実験心理学研究、21(1), 53–62

ゴロンボク，S　フィバッシュ，R（著）小林芳郎　瀧野揚三（訳）1997（Golonbok, S.& Fivush, R. 1994 *GENDER DEVELOPMENT* Cambrige University Press）

細見典子　1997「ヘッジ表現から見た日英文化比較－「甘え」社会と個人社会の言語－」神戸学院大学人文学会［編］

依田　明・安香　宏（共著）「青年心理」1973　新曜社

加藤和生　1999『「甘え」に関する認知・人格社会心理学的観点からの総合的アプローチ』平成 9–10 年度　科学研究費補助金成果報告書　基盤研究（C）(2) 課題番号 09610129

加藤和生　2001『「甘えの心理」測定尺度開発および甘え行動・交流状況の認知過程の分析』平成 11–12 年度　科学研究費補助金成果報告書　基盤研究（C）(2）課題番号 11610126

北山　修　1999「日本語臨床 3⑵〈甘え〉について考える」星和書店

木村　敏　1972「人と人との間－精神病理学的日本人論－」弘文堂

金　容雲　1983「韓国人と日本人」サイマル出版会

工藤　力　ディビット・マツモト　1996「日本人の感情世界」誠信書房

熊倉伸宏　1993『「甘え」理論と精神療法』岩崎学術出版

Maccoby, E. 1990 Gender and relationship. *American Psychologist*, 45, 284–294

正村俊之　1995「秘密と恥」勁草書房

南　　博　1994「日本人論－明治から今日まで」岩波書店

中山　治　1993『「きずな」の心理』洋泉社

中山　治　1996「〈甘え〉の精神病理　日本人の病理を深層分析する」洋泉社

長山恵一　2001「依存と自立の精神構造」法政大学出版局

大橋正雄・長田雅喜（編）1987「対人関係の心理学」有斐閣大学双書

小此木啓吾　1968「甘え理論（土居）の主体的背景と理論構成上の問題点」『精神分析研究』、14, 14–19.

小此木啓吾　1980「現代青年とモラトリアム人間」『臨床社会心理学と－統合と拡散』至文堂

小此木啓吾　1998「現代の精神分析」

小此木啓吾　1999「精神分析のおはなし」創元社

荻野恒一　1968「甘え理論をめぐって」14 巻 3 号

落合良行　伊藤裕子　斎藤誠一（著）改訂版　2002「青年の心理学」有斐閣

西園昌久（監修）1993「今日の精神分析」金剛出版

小学館ロベール仏和辞典編集委員会　1988「小学館ロベール仏和辞典」小学館

尚学図書（編）1981『国語大辞典』新装版　小学館

関　峋一　返田　健（編）1983「大学生の心理」有斐閣選書

外山嘉奈子　高木秀明　1991『青年期の「甘え」の心理に関する一研究－困った」場面の分析を通して－』横浜国立大学教育紀要

外山嘉奈子　1993「児童心理《特集》甘える子　12 月号」金子書房

祖父江孝男　1972「日本人の意識と国民性の変遷過程」飽戸　弘・富永健一・祖父江孝男（編著）1972『変動期の日本社会』日本放送出版協会

瀧本孝雄　青柳　肇　鈴木乙央（編）1984「現代青年の心理と行動」福村出版株式会社

竹友安彦　1988『メタ言語としての「甘え」』『思想』768, 122–155.

田中秀央（編）2000「LEXICON LATHIN-JAPONICUM　羅漢辞典」(第 34 刷）研究社

辻井正次（編）1998「現代青年の理解の仕方」ナカニシヤ出版

瓜谷良平（編）1970「イラスト入りスペイン語辞典」大学書林

和田秀樹　1999「〈自己愛〉の構造」講談社

和田　実　1993　同性友人関係；その性および性役割タイプによる差異、社会心理学研究、8（2)，67–75.

和田　実　1996　同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連性．心理学研究、67（3)，232–237.

山口　勧　1998「社会心理学－アジア的視点から－」日本放送出版協会

資料1　甘え尺度の刺激文

状況A　対象：友達
◆大学で明日テストがありますが、その講義は朝一番目にありAは朝起きることができずほとんど出席していませんでした。そのため、テスト情報や、何から勉強していいのかわかりません。「このままでは試験に合格できるかわからない」とAが悩んでいた時、同じテストを受ける友達が元気のないAに気づき「どうしたの？」と声をかけてきました。

状況B　対象：親友
◆今日、Aは些細なことから友達とケンカし、友達にとてもつらいことを言われました。Aはとても傷つき、落ち込んでいます。そんな時、元気のないAに気付いた親友から「何かあったの？」と声をかけてきました。

状況C　対象：母親
◆街で買い物をしていた時、Aが前々からどうしても欲しいと思っていた商品を偶然見つけました。その商品は人気が高く、店頭に出てもすぐに売れてしまいます。今すぐ買いたいところですが、それを買うには少しお金が足りず、その日は仕方なくあきらめて帰りました。しかし、家に帰ってからもどうしてもあきらめきれず、考え込んでいると、「どうしたの？」と母親が声をかけてきました。

状況D　対象：父親
◆今日、街で久しぶりに会った友達と話し込んでしまい、帰りの最終電車に乗り遅れてしまいました。今からAの住む家まで帰るには、父親に電話して車で迎えに来てもらうか、かなりの距離を歩いて帰るしか手段がありません。「どうしよう」と困っていた時、父親から「どうかしたのか？」とAの携帯電話に電話をかけてきました。

状況E　対象：恋人
◆最近、Aの恋人はバイトや学校のレポート提出などで毎日忙しく、メールのやり取りだけでほとんど会っていません。今日、Aは恋人が翌日のテスト勉強で忙しいのは承知のうえで、久しぶりに電話をしました。恋人と楽しく話しているうちに、Aはなんだかどうしても今から会いたい気持ちでいっぱいになりました。

資料2　甘え尺度の項目

甘え欲求
・友達（親友、母親、父親、恋人）に頼りたい
・私のわがままを聞いて欲しい
・友達（親友、母親、父親、恋人）に甘えたい
・友達（親友、母親、父親、恋人）に何とかして欲しい
・友達（親友、母親、父親、恋人）をあてにしたい
・私の気持ちをわかってほしい
・察して欲しい

甘え受容予測
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私を冷たくあつかうだろう（－）
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私を受け入れてくれるだろう
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私に愛想をつかすだろう（－）
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私を甘えさせてくれる
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私の気持ちをわかってくれる
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私のわがままを聞いてくれる
・友達（親友、母親、父親、恋人）は私を相手にしないだろう（－）
・友達（親友、母親、父親、恋人）は嫌々私を受け入れるだろう（－）

甘え抵抗感
・自分のために友達（親友、母親、父親、恋人）に何かしてもらうのは苦手だ
・友達（親友、母親、父親、恋人）には素直に甘えられない
・友達（親友、母親、父親、恋人）に甘えたいが甘えられない
・友達（親友、母親、父親、恋人）に甘えると迷惑をかけていると感じる
・友達（親友、母親、父親、恋人）を頼りにしたいが不安だ

（－）：逆転項目

資料 3　甘え状況別の甘え尺度の項目

状況 A・対象：友達
- 甘え行動思考
  - ・友達にテスト情報やノートを貸してもらうよう頼んでみる。
- アンビバレントな甘え行動思考
  - ・友達にテスト情報やノートを貸してもらうよう頼んでみる。
- 拒否・回避的甘え行動思考
  - ・友達に頼るべきではないと思い自分だけの力でどうにかしようとする。

状況 B・対象・親友
- 甘え行動思考
  - ・親友に今日あったことついて話し、なぐさめてもらう。
- アンビバレントな甘え行動思考
  - ・親友に今日あったことついて話し、なぐさめてもらいたいが言い出せず、自分だけでどうにかしようとする。
- 拒否・回避的甘え行動思考
  - ・親友に頼るべきではないと思い、自分だけの力でどうにかしようとする。

状況 C・対象：母親
- 甘え行動思考
  - ・母親にお金を貸してもらうように頼んでみる。
- アンビバレントな甘え行動思考
  - ・母親にお金を貸してもらうように頼みたいが言い出せず、買うことをあきらめる。
- 拒否・回避的甘え行動思考
  - ・母親に頼るべきではないと思い、買うことをあきらめる。

状況 D・対象・父親
- 甘え行動思考
  - ・父親に迎えに来てもらうよう頼んでみる。
- アンビバレントな甘え行動思考
  - ・父親に迎えに来てもらいたいが言い出せず、歩いて帰る。
- 拒否・回避的甘え行動思考
  - ・父親に頼るべきではないと思い、歩いて帰る。

状況 E・対象：恋人
- 甘え行動思考
  - 恋人に会いたいことを伝え、会いに行く。
- アンビバレントな甘え行動思考
  - 恋人に会いたいことを伝えたいが言い出せず、その日は電話だけで終わる。
- 拒否・回避的甘え行動思考
  - 恋人にわがままを言うべきではないと思い、会いたいことを伝えずその日は電話だけで終わる。